# から狼へ～熱き血潮！燃え盛れ青春の汗！別れの涙は溢れる脂！肉汁滴る超巨大和牛ハンバー

シバケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ベン・トー～狼から狼へ～熱き血潮！燃え盛れ青春の汗！別れの涙は溢れる脂！肉汁滴る超巨大和牛ハンバーグ弁当３００円

【Ｎコード】
Ｎ０９９２Ｙ

【作者名】
シバケン

【あらすじ】
最強の狼《魔導士》金城優がまだ若く、未熟だった時代。
その時代を牽引し、未熟ながら才溢れる金城に次の時代を託そうとするもう一人の最強鈴木一。
舞台はスーパー。
今空前絶後の争奪戦が始まる。
これはＨＰ同好会がまだ部であった時代の物語である。

## （前書き）

本作はベン・トーというライトノベルの二次創作です。読んだことがない方にはわかりづらい個所も多々あるでしょうがご容赦ください。もちろん読みやすいよう努力はしましたが……私自身未熟ですので（汗）それでは！

烏田高校には最強の狼がいる。
曰く「無敵超人」
曰く「鉄人」
曰く「腹ペコ王」
そして何よりもその狼は半額弁当を愛していた。
「その販売形態！そして妥協なき味！そして何よりも俺みたいな馬鹿がたくさんいるスーパーは最高だ！」
このあたり一帯はもとより、全国のスーパーにその名が知れ渡っている最強の狼こと鈴木一（すずきはじめ）は吠えた。
身長１７０ｃｍ、体重６０ｋｇ、やせ形。成績普通。体育３（五段階評価）
これが最強の狼のスペックである。金城優はいつも疑問に思う。
（何故こんな人があれほど強いのだろうか）
金城自身鈴木に劣っている部分は何一つないと断言できる。勉強ならばダブルスコア。体育でも同様。しかし争奪戦だけは一度たりとも勝てたことはなかった。
金城が鈴木に敗因を問う時いつも決まって彼はこう言った。
「愛が足りん！」
愛で強くなれるのならば野球少年はすべからくイチローになっているだろうし、サッカー少年は本田、中田にでもなっているだろう。
金城は納得しなかった。
そしてまた敗北を重ねる。

夏が来た。唐突に鈴木が立ち上がり宣言する。
「俺は受験勉強がある。親に東○に入れられた。まあ……つまりだ。今日本日をもって争奪戦を……狼を卒業する！」
がたっ！部室がどよめいた。東○……高額なＤＶＤを売りつけ、

しかもＤＶＤは手元に入らず塾で管理。講師は一級品の口のうまさを誇り、ＤＶＤを眺めているだけの多くの学生に勉強したと錯覚させる。その手並みはもはや詐欺師、いやジャ○ネットた○かクラスなのである。烏頭みことが言う。

「あの……○進はやめ」

「いや！皆まで言うな！俺が去って寂しいのはわかる！俺も寂しい！でもわかるだろう！？俺は安○内先生と一緒に大学に受かるんだ。目指せマーチ！目指せ早慶上智！ここまで来たら東大でしょ！」

部員一同首を振って思った。

（（（（（こりゃダメだ））））））

鈴木は微妙な顔つきの部員たちを見て、顔を歪めて言う。

「みんなそんなに寂しそうな顔をするなよ。俺まで寂しくなっちまうだろ」

部員一同は何も言わない。言えない。

「まあうちにこんな湿っぽいのは似合わねえよな……ってことでだ今日はアブラ神の店で最後の大暴れをしようと思う。つーか出る。今日出るわ月桂冠。間違いなく出る！だから今日だ！今日を〆にしたいと思う。つーわけで今日は全員ホーキーマートな！以上！」

どさっと椅子に座ると鈴木は自分の持ちこんだ箱○をプレイし始める。

ＦＡＢＬＥ２……その圧倒的スケールと見せかけた一本道ならぬレールプレイングゲームは多くのプレイヤーを困惑の渦にぶち込んだ。レール（光が指し示す道）に沿ってプレイするとあら不思議、１５時間弱でゲームがクリア出来てしまう。しかもラスボスが……怪作である。しかしこのゲームの素晴らしさはレールを外れた先にある。子供時代の選択肢によって一つの街の未来が変わったり、選択肢、行動によって外見が変わったりする。また結婚することもでき一児のパパや二児のパパになれたりもする。重婚も可能。３Ｐ、４Ｐなんでもござれ、ただし性病だけには気をつけないと割と取り返しがつかないことになってしまう。超怪作である。まあ物件買い

占めたら色々終わりますけどね。
金城はプレイを始めようとセッティングしている鈴木に声をかけた。
「何故今日月桂冠が出ると知っているんですか？」
もしアブラ神に聞いたとすればあまりいい話じゃない。さらにアブラ神に頼んだとするならばそれはもはや豚以下の畜生である。金城は睨みつける。一年部員たちはそわそわし、上級生たちはクスクス笑っていた。
「ぁあ？そんなん勘に決まってんだろうが」
金城と他の一年生たちは皆驚いた。こいつは何を言ってるんだ？と。
「三年も争奪戦やってりゃなんとなくわかるんだよ。ああ今日は来るなーってさ。んでそんな日は絶対来る。ヒャクパー来る。だから今日にしたんだ。びびっと来たからな」
鈴木はニヤッとして無線コントローラーを金城に向けた。
「まあ……なんだ……今日が最後だからな、優。そろそろ俺を倒して見せろい」
そう言って鈴木はゲームの世界に没入していった。嫁探しである。ちなみにこのゲーム美人率が異常に低い。洋ゲーは大抵そうだが、顔がユニークな方ばかりなので嫁探しには大変苦労する。抜け道もある（ロリコン限定）が色々と面倒……というよりも仕様外の方法なので苦労することには変わりない。鈴木は当然のごとくロリコンでもあったので本日の嫁はロ〇。鈴木のトライアル＆エラーの旅が始まった。
金城はその背中を見て拳を握りしめた。
（勝ちたい……この人に……勝ちたい）

その夜ホーキーマートは殺気に包まれていた。出たのだ間違いなく月桂冠クラスの弁当が。その名も「滾らせよ！熱き血潮！燃え盛れ青春の汗！別れの涙は溢れる脂！肉汁滴る超巨大和牛ハンバーグ

弁当３００円」。つまり――
「１５０円……か」
金城は最近肉類を控えていた。しかも今日の昼はあんぱん一つという高校生にとってあまりにも少ない量だった。さらに元が３００円だというのも異常である。明らかに原価割れしている。ぐぅるる。腹の虫が猛り狂う。食べたい。この弁当を……知らず金城ははじめてスーパーに来たときのように立ち尽くしていた。他の部員が声をかけようとすると――
「おいおい、野暮ってもんだぜ。これでいいんだ。これでよ」
部員を止めた鈴木はニヤリとして、その場を去る。
「嗚呼……今日はいい日になりそうだ」

「よお怪物」
お菓子コーナーで食玩をあさっていた鈴木に声をかけてきたのは――
「相変わらずうっとおしい髪型してんな《毛玉》」
毛玉はにやにやしながら鈴木に絡む。
「今日はすげえ日だな。この辺一帯の猛者、いや下手すると全国から集まってんじゃねえか？」
鈴木が表情も変えず答える。
「まあ俺が呼んだからな。適当に強い奴をさ。月桂冠出るよってメールしたら来たわ」
毛玉が呆れて
「いや、おめーのはほぼ予言なんだからあんましばらまくなよ。まあ……なんだ寂しくなるな」
鈴木がにやりとして笑った。
「たぶん終わった後、寂しさなんて吹き飛んでるぜ」

アブラ神が一礼して、店内を闊歩する。その光景を鈴木は胸に刻む。これが最後の戦い。自分の伝えられることすべてをこの一戦に。

ちらりとアブラ神が横目で鈴木を見る。その一瞬の邂逅に何を思ったのか、それは二人にしかわからない。アブラ神が半額シールを張り終える。件の弁当には黄金の月桂冠。アブラ神がいつもより深めにお辞儀をして扉の奥に消えた。

　そして始まる……狼たちの宴が。

「「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおお」」」」

　唸りをあげる店内。全国から集まった猛者たちが一斉に弁当コーナーへ向かう。

　弁当コーナーに狼たちが入り乱れ乱戦模様を形成していた。

　だが……最強の狼が戦線をぶち破る。否――

「ベルセルクが来るぞぉ！！」

　爆ぜた

　爆撃のような一撃、大勢の二つ名持ちが吹き飛んだ。最強、最狂、最凶、その狼は畏怖を持ってこう呼ばれる。

《ベルセルク》

「おいおいぃ！？こぉの程度かよ！？もうちっと愉しませろや！なあ！」

　ベルセルクこと鈴木一は一気に弁当コーナーへ詰め寄る。そこへ――

「そう一気にチェックメイトじゃ味気ないでしょう。いっちゃん！」

　颯爽と割って入った派手めな女性を見て山田は笑う。

「そーうこなくっちゃだなぁマっちゃん！」

　他の狼たちがどよめいた。

「オオカバマダラ……女帝（モナーク）だ！」

　激突

　先ほどよりはるかに大きな衝撃が店内に奔った。西区最強対東区最強のバトル。荒々しく本能の赴くままに闘うベルセルクと美しく蝶のように舞ながらも必殺の攻撃を放つ《オオカバマダラ》松葉菊。

幾度となく死闘を繰り広げてきた二人の攻防は一瞬他の狼たちの動きを止めるほどだった。それほど美しく、荒々しく、強大だったのだ。しばらく続いた攻防であったが――

「わりーなマっちゃん。今日はお前さんがメインディッシュじゃねーんだわ。またな」

軽い口ぶりからは想像もできないほどの強烈な一撃で鈴木は因縁の相手オオカバマダラを沈めた。鈴木は吠える。

「今日の俺はすこぶる調子がいい！誰でもいい！俺を止めてみやがれぇぇ！！」

その姿は正にベルセルク。神の加護を受けた狂戦士そのものであった。ぐぅるるる。ベルセルクの腹が鳴り響く。それは処刑宣告。それでも――

狼たちは突貫した。それは誇りゆえか、はたまた別の何かだったのか――――

鈴木は壮絶な笑みを浮かべてその全てを受け止めた。

＞i33889―4237＜

大勢の躯の上に最強が立っていた。その背に焦がれた。憧れた。いつか越えたいと、超えたいと……だが――

「そんなもんどうでもいい！俺は、俺は滾らせよ！熱き血潮！燃え盛れ青春の汗！別れの涙は溢れる脂！肉汁滴る超巨大和牛ハンバーグ弁当が欲しい！」

今の金城には弁当を食すこと以外何も考えられなかった。

最強の狼ベルセルクこと鈴木一はその金城の姿を見て静かにほほ笑んだ。

「なら俺を越えねえとなぁ！優ぅ！俺の後ろに弁当コーナーがある。単純だろ？俺を倒してみろや！」

最強はその狼の生涯で初めて弁当コーナーから背を向けた。

「ベェルセェルゥクゥゥゥゥゥゥゥウ！！！」

「かぁねぇしぃろぉぉぉおお！！！」

ぶつかる二つの狼。誰もが金城の敗北を想像した。しかし――――
「……拮抗……している……のか」
二つの拳が静止していた。
「食べたい食べたい食べたい食べたい食べたい食べたい食べたい」
金城はもはや鈴木を見てすらいなかった。ただ弁当を、あのボリューム満点な弁当を食したい。ただそれだけが金城優を突き動かしていた。
「心を濁さず、狙いを澄まし、ただ弁当を想え！そうすりゃてめえは最強の狼になれる。いやなってみせろ！この俺を越えて行けェ！」
金城は無意識に宙へ跳んだ。
「何ィ！？」
天井に足を設置、脚力と体重そして重力を味方につけた一撃。美しく苛烈。鈴木はすかさず迎撃した。鈴木の一撃も人外。幾人もの狼を地に伏せてきた剛腕が唸る。共に必殺。
＞ｉ３３８９０―４２３７＜

轟音

店内に史上空前の衝撃が駆け抜けた。そして――
「それでいいんだ。優。お前が……これから……」
最強の狼が崩れ落ちた。
金城は最後の力を振り絞って弁当コーナーへ辿り着き、勝者の証。半額弁当を手に取った。そして力尽きた。

金城が目を覚ますとそこは見知った場所だった。
「部室……」
「よう金城！起きたのか？」
そこには鈴木一がいた。金城は起き上がる。全身が痛い。これほど身体を酷使したことが今までにあったろうか。金城は考える。
「今は無理すんなよ。つーか腹減ってるだろ。な！俺はどん兵衛食

うから気にしなくていいぞ。今日はなんとなくどん兵衛の気分なんだ。あっためてやるから待ってろよい」
鈴木は軽快にステップしながらレンジに向かった。
（こ、この人は本当にベルセルクなんじゃ……）
ちんという音がして鈴木が弁当を持ってきた。匂いを嗅いだ瞬間金城の身体から未知の力が湧いてきた。腹が鳴る。鈴木が熱い弁当を手渡す。
「開けてみろ」
言われずとも金城は開けるという選択肢以外考えつかなかった。蓋を開ける。肉の匂いが部室じゅうに広がった。巨大和牛ハンバーグに金城は箸を刺す。中からぶわっと芳醇な肉汁が溢れだす。滝のように。とっさに金城はそのこぼれおちる肉汁ごとハンバーグにかじりついた。肉汁ひとしずくたりとも、もったいないと思ったからである。和牛にしか出せないであろう肉本来の甘みが口いっぱいに広がる。そこで金城は気付く――
（ば、馬鹿な！このハンバーグ……中にぎっしり肉が詰まっているだと！？普通これほどの肉汁を出そうと思ったら中に仕込まないと……だがこれは……熟練の技で上質な和牛の脂を中に閉じ込めているのか。……これはもはや弁当の域ではない！加えて粗くカットされた玉ねぎもいいアクセントになっている。ご飯が進む。エクセレント！）
鈴木はその光景を眺めながら幸せそうにどん兵衛をすすっていた。どん兵衛と甘く見ることなかれ。その優しい出汁の効いたスープは食べるものを癒す。派手さはないが、狼の傷を癒すには最適の食べ物であった。
金城がかっくらい、鈴木がすする。部室に食音が響き渡っていた。
食後、金城は鈴木に問うた。
「今日俺は何故部長に勝てたんでしょうか？」
鈴木が二カっと笑い答える。

「愛があったからさ」
鈴木は笑顔のまま続ける。
「お前は今日、全てを理解したはずだ。身体で、心で、舌で、腹で。それを忘れない限りお前は最高の狼であれるだろう。忘れるなよ今日の弁当を。この俺から奪ったんだ。忘れたら承知しねえぞ！」
鈴木は背を向け部室を出る。
「部長！」
鈴木は振り向かず背を向けたまま最後の一言を言った。
「あとは任せる」
そうして最強（ベルセルク）の狼鈴木一は静かにＨＰ部を後にした。

金城優は佐藤洋との共闘の最中、昔を思い出していた。それは遠い記憶。もう戻ることの叶わない至極の時間。佐藤洋はどこかあの男の面影がある。金城はそう感じていた。だからこそ――――
（洋、強くなれ。俺を、仙を倒せるくらい強く。そして……俺を倒してみろ）
《魔導士》は今宵またスーパーの空を舞う。

## （後書き）

実は私自身スーパーのアルバイトをしていた時期があります。何度か半額神の経験もさせてもらいました。その経験が相まってベン・トーという作品に惹かれちゃいました、もうぐいぐいとw残念ながら私のスーパーでは争奪戦はありませんでしたが……とても残念です。大猪はいっぱいいましたがwwwあ～あったな～って思い出すところが随所に散りばめられていてそこもベン・トーの魅力の一つですね。

ここまで読んでくれた皆さんには深い感謝を。もしベン・トーを読んだことがない人は今すぐ書店にGO！です。アニメは今まさにやっている最中。今が旬！皆さんこのビッグウェーブ乗り遅れたらそんでっせ（真顔）

それでは！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0992y/

---

ベン・トー〜狼から狼へ〜熱き血潮！燃え盛れ青春の汗！別れの涙は溢れる脂

2011年11月4日03時36分発行